

# 栄光

## 『新たな出発』

教 説

申命記4章32節～40節

マタイによる福音書28章11節～20節

岸 俊彦

|                                    |
|------------------------------------|
| 説教・「新たな出発」<br>岸俊彦牧師……1             |
| 特集・イースターの<br>喜びを分かち合う<br>……………2    |
| 追悼・<br>杉浦花子姉……5<br>榎原温子姉……5        |
| 説教・「あなた方は<br>キリストの手紙」<br>種房惇子教師……6 |
| 図書茶話会報告……7                         |
| 長老のファイル……7                         |
| 牧師の書斎から……8                         |

キリストの生涯、その死と復活

は2千年の教会の歴史の始まりです。キリストは私たちと共にいてください。終わりの日まで教会を支え導いてくださいます。この恵みに応えて私たちはどのように歩んでいくべきでしょうか。

キリストの言葉です。「わたしはあなたがたを遣わす。それは、狼の群れに羊を送り込むようなものだ」(10・16)。キリストを見捨てた信仰の小さい弟子たちが権謀術数渦巻くこの世を生き延びることができるとでしょうか。「蛇のように賢く、鳩のように素直になりなさい」(同節)ともキリストは教えてくださいました。弟子たちに、また、私たちに2つのことが兼ね備わっているでしょうか。

この世の子らの方が光の子らよりも賢いのです(ルカ16・8)。

見張っていたのにもかかわらず墓が空っぽになったと、番兵たちは祭司長たちと長老たちに報告しました。彼らは金を渡して「キリストの遺体は盗まれた」と噂を広めるようと命じました。この噂は今日に至るまでユダヤ人の間に広まっています(マタイ28・11～15)。

復活のキリストに出会い、弟子たちに伝言するようにと命じられた2人のマリアは、番兵たちの報告より遅れました(11節)。ともかくも彼女たちは、言われた通り復活のキリストの言葉を弟子たちに伝えました。弟子たちにできるのは、彼らに伝えられた復活のキリストの言葉に、ともかく従うこと

とです。弟子たちは伝えられた言葉通り、「ガリラヤへ」(10、16節)向かいました。

キリストの言葉通り、ガリラヤの山で復活のキリストに弟子たちは出会うことができました。しかし、疑う者もいました(17節)。「疑う」というギリシア語の元々の意味は、「二つの道」「二つの決断」を意味します。同時に二つの道を行こうとする、あるいは二つの方向に歩んで行こうとすることです。当然ですが、私たちは同時に二つの道を歩むことはできません。二つの方向を見て両方へと進んで行くことはできません。どちらか一つの道に決めかねていることを「疑う」というのです。

この世の力が、誘惑が、富が、人間関係が、私たちが引つ張ります。しかし、復活のキリストが疑う者に、近づいて語りかけてくださいます。私たちが疑う罪を赦し、その罪を砕き、悔い改めへと導いてくださいます。父と子と聖霊の御名による洗礼は、罪の赦しと悔い改めを私たちに与える計り知れない神の恵みです。キリストの教えは、疑う私たちに弟子として御

国に向かつて踏み出し、歩み続ける力を与えます。

キリストが共に歩んでくださる一筋の道があります。キリストが語ってくださったことに聞き従い、御心を行い、永遠の命へといたる道です。その道へと踏み出し、歩み続ける力を与えるために、私たちはキリストの命に与る聖餐と共に祝います。この恵みの中で、繰り返し自らの罪を悔い改め、罪の赦しを信じ、キリストの弟子として、何度でもやり直すのです。やり直すことができます。

疑う弟子たちに復活のキリストは近寄り語ってくださいました。使命を与えてくださいました。疑う弟子さえも主は用いてくださいます。主は共にいてくださいます。キリストと共に世の終わりまで、御言葉によって力を与えられ、私たちは御国を目指します。キリストの言葉に生かされます。キリストの言葉は私たちの喜びとなるでしょう。困難な時の支えとなるでしょう。迷ってもかまいません。疑ってもかまいません。ともかく共にキリストの言葉に聞き従うのです。

# イースターの 喜びを分かち合う



イースターは、教会では主の復活を祝う大切な日。  
でも日本では、ウサギのお菓子や卵を飾る行事とされているようです。  
イースターについて周りの方に聞かれたら何と答えますか？

## 復活の力

久保田あけみ

3月2日は4年前に私の2歳年下の弟が亡くなった日です。救急車で運ばれて、そのまま召されてしまいました。そんな弟のことを思いだしている時にこの原稿の依頼がありました。

「復活について」です。

小さい頃は一緒に遊び、喧嘩相手でもありました。大人になると2人でスキーを担いで夜行列車に乗り、スキー場が開くまで近くの駅でひと眠りし、彼が朝一番に淹れてくれたコーヒーマグの味は忘れられません。弟とはあまり真面目に話をしたことはありませんでしたが、私が50歳で初めて結婚を決めた時は、真っ先に彼に相談しました。彼は「自分の幸せだけを考える」と一言。その一言で前進。なにも考えませんでした。確かに弟は今でも私の心に生きています。でもイエス様の復活は私にとってどんな意味があるのでしょうか。

か？ 度々人から聖書の中でどうしてもわからないことは「復活」だと言われます。説明に困ってしまいます。自分なりに最近感じていることを、話したいと思います。聖書を読むと、私には絶対できないと感じる箇所がたくさんあります。たとえば「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい」(1テサロニケ5・16-18)。「いつも」「絶えず」「どんなことにも」の言葉は引つかかっています。他にもそのような御言葉があります。読みながら「無理」と思うことが多くあります。けれども、私はイエス様の復活は確かなことだと信じています。死から生へです。できないと思うことでも、復活の力が働いている御言葉は「できる」こととして受け入れられます。不可能は可能となり、私の心に生きた言葉として元気が与えられるのです。

復活の力。右も左も閉じられてしまっているような世界。先が見えない世界。でも諦めずに上を向いて歩いていけば必ず、「不可能」から「可能」へ変えてくださる神様を信じて。

## イースターの喜びを 分かち合う

河野滋由

イースターおめでとうございます。イースターは、我々の罪を背負って十字架の刑に処せられたイエスさまが、預言通り3日目に死人の中より甦り、復活したことを祝うお祭りです。

春分の日以後の満月の次の日曜日です。毎年、日が変わります。毎年、日がばらばらであることから、日本ではあまり記憶されていません。東京デイズニランドやサンリオピューロランド等の大手テーマパークでは、春のお祭りとしてイースターイベントを開催するようになりました。

イースターエッグの卵は、復活や生命のシンボル。鳥が卵の殻を破って出てくる姿と、処刑後に復活されたイエスさまを重ねて卵が使われていると言われています。うさぎは1年に何度も出産するこ

とから、子孫繁栄を招くと言われています。

私はロンドン駐在時代にイースター休暇を利用してオランダに旅行した際、チューリップの球根を買い、それが自宅の庭で開花していく様子を、生命の復活とイメー

ジをダブらせて見ていました。話は少しかわりますが、復活や生まれ変わることをとする考えは、洋の東西を問わずあります。例えば、中国には「日新」、日々

に新たなり、という格言があります。今日という日は今日しかない。王様にも庶民にも等しく新たな一日が訪れるので、大切に過ごさなければならぬというものです。私たちは、我々の罪を背負って十字架の刑に処せられたが復活された、イエスさまに守られて、人生を前に進んで行くことを見守られ、そして収穫を祝い、神さまの恵みに感謝し、喜びを分かち合えることに感謝です。



## イースターを前にして思うこと

佐々木啓子

イースターおめでとうございます。イースターとはキリストの復活を祝うと同時に春の訪れを祝う祭典であるようです。人間のすべての罪を背負い十字架にかけられて亡くなり、三日目に蘇られた主イエス・キリストを覚え感謝し、祈ってイースターを迎えたいと思

っています。厳しかった冬の長いトンネルをやつと抜け出す季節がやって来ました。待ちに待った春ですが、私の心の内はまだまだ春には程遠いところにあります。

昨年、降って湧いたように悩み事を抱えてしまいました。以前友人に「啓子さんはいいいわね。悩み事なんか何もないでしょ」と言われたことがあります。

「悩み事のない人なんかいないわよ。ただ言わないだけよ」と返しました。人間誰しも大なり小なり悩みがあると思います。いつも頭の中はそのことはいっぱい。物事

が少しも前に進みません。しかし今年に入って幾分心に変化が生まれました。考えるのは止めよう、なるようにしかならないのだからと。気分が幾分楽になりました。

しかし、3月1日に次女から、家族全員がコロナにかかり、自宅待機に入ったと連絡がありました。行つて助けることも出来ない新たな心配事が出来ました。急いで自転車でスーパーに行き、大きなクール便で食料品を送りました。が、帰宅したら主人が「岸先生から原稿の依頼が来た」と言います。一瞬間の中が真っ白になりました。が、不思議なことにその後すぐに「まだまだポーツと生きているわけにはいかないぞ」という思いが湧いてきました。8日近くになったら、次女から、自分の熱も下がりが、子どもたちもすっかり元気になったと電話があり、私も頑張つて文章を練れるようになりました。良い方向への急展開です。

4月9日には私も何とか悩みのトンネルを抜けることができそうです。試練は成長の糧でもあると学ぶことが出来ました。有難うございました。

## イースターの喜びを分かち合う

田宮 一

イースター（復活祭）とは、キリスト・イエスが十字架上で死に、3日目に死人のうちよりよみがえったことを祝う・喜ぶことだと思っ  
ています。一度死んだイエスがよみがえったことを信じる、イエスを主とする信仰です。現在の人類の医学知識では理解できない、死が全ての終わりではないことを知らせてくれています。母親はイエスが主である信仰を持ち、この世の命を終える姿を私に教えてくれました。私はイエスが主であると信じたいのです。以上が『栄光』にふさわしい部分です。

死亡数はコロナによる死亡や老人人口が増えていることの考慮はるかに超えるものです。その死亡者の大半は老人であり、1年を通して死亡者の推移をグラフにすると、ワクチンの接種をした老人の人数のグラフとシンクロしてきます。ちょうどそのピークは2週間ほどずれて不思議なほどに一致してきます。そのような事実を皆さんは知っているでしょうか。確認のためには亡くなった方のワクチン接種歴を調べる必要があるのですが、どこの役所も調べようとはしていません。これがこの世です。何を信じて生きるか、各人に任せられています。

私も70歳を迎えました。日本では老人の死の激増は望まれているかのようにニュースになります。墓前礼拝が好きで、待ち望んでいますが、経堂北教会のお墓に入れてもらうことが先になるかもしれないですね。このころはテニスのうまい一人の女性と二人で切磋琢磨してテニスがどんどん上達しています。若い時に実現できなかった女性と二人でテニスでデートができています。感謝です。

## イースターは難しい!?

内藤 慎也

高校の時「倫理社会」という科目があり、ある日、宗教を取り上げた授業で先生から「内藤、キリスト教についてみんなに話してみ」と問われたことがあった。普通の公立の高校だったのだが、僕が牧師の息子であることを知っていたので振ったのだろう。献身性や愛について話した記憶がある。

それにしても、高校時代の自分はキリスト教に対してどれほどの理解度だっただろうか。僕は牧師家庭に生まれ、幼児洗礼を受け、言わば信仰を世襲(?)した感もあり、信仰に対しても自らの意思がどれほど働いていたか。高校1年の時に信仰告白をしているが、信仰に対してまだフワフワしていた気がする。正直、大学で上京してきて、経堂北教会で鍛えられた面がかなりある。

さて、今回のお題である。依頼文に「イースターについて周り

の方に聞かれたら何と答えませんか?」とある。高校時代よりはともに説明はできるかもしれない。だが、このお題での、そもそもイースターの解釈、つまるところ「復活」について考える時、今となつては「待てよ…」となる。その本質の部分を本当に理解できているのだろうか。

まあ、信仰は「理解」ではない。信じることだ。ここで必要なのは信仰の「確信」か。僕はそこがたぶん弱い。確信もただの主観的な帰結かもしれないが、僕は人生を通して究極の確信を得ようともがいていく気もする。当然復活は最重要テーマで、本文タイトルはその辺の心理の表れでもある…。

高校時代から時が経ち、イイ歳になつてしまつたが、相変わらずこんな程度である。でも悲観はしていない。自分の生きてきた歴史があり、教会があり、そして兄弟姉妹との信仰の共有がある。そこにはささやかな確信があるからだ。

ん? イースターの喜びを分かち合う特集だった…。まあおかげで信仰と向き合う喜びとなつた…。ということ、内容にはご容赦を。



## 追悼

## 母への感謝

故・  
杉浦花子姉

母、杉浦花子の葬儀の時に岸先生がお話くださった中で印象に残ったお話があります。母が結婚後に平塚で受洗してから経堂北教会に通い始めるまで教会に通わなかった空白の20数年があつたらしいのです。照らし合わせてみると、兄と私が生まれてから学校を卒業するまでの年月でした。

私は幼少期に母の勧めでヴァイオリンを始めました。ミッシェン系の女学校出身だった母はそこで讚美歌や西洋音楽に接して好きになり、子どもに楽器を持たせたそうです。あいにく兄は弾くことより楽器の構造に興味があり、分解してしまつたので母は諦めたそうですが…(兄はその後、父と同じエンジニア系に進みました)。

娘に音楽を続けさせることは経済的にも体力的にもとても大変だ

つたと思います。私が小中学生の頃、家へ帰ると英文科出身の母が中学生に英語を教えていました。当時は知りませんでした。私が音楽を続ける費用の足しにしてくれたのだと思います。寡黙だった父に代わり、子どもたちの表立った用事は母が引き受けていたので教会に通う時間は取れなかつたでしょう。私の卒業と同時に母は教会通いを再開しました。

苦勞して私に音楽を続けさせてくれた母には本当に感謝しかありません。他にも、仕事の時間が不規則な私のために息子の面倒をよく見てくれました。おばあちゃんが大好きな息子は私が出かける時はニコニコなのに、母と別れる時は大粒の涙を流すのでした。兄が0歳の双子と4歳の子を抱えて一家でロンドンに転勤した時も、母は同行し数か月手伝っていました。最近になって母方の詳しい家系図がわかり、母をはじめご先祖の方々が大変な時代を生きて私たちに命を繋いでくれたのだと思うと、与えられた生を大切にしなければ、と改めて思います。感謝の思いで一杯です。(娘・上藤由紀子)

## 姉を偲び、神様に感謝

故・  
榊原温子姉

今、一番に思うことは「信仰を持ってたことに心から感謝です」。姉、榊原温子が膵臓癌と判つたのは、今年1月末頃でした。2月9日に治療方針を決める中で姉は「今迄本当に幸せだったから何時逝つてもいいの。神様にお任せ」と言っていました。入院してしまつた

誰とも会えなくなつてしまつたから、緩和ケアにしてほしいと。2月21日に介護認定のため、ケアマネと市職員と医師と看護師が自宅へ来て、医師の診療を受けている最中に、急に血圧が下がり、そのまま呼吸が止まつたそうです。医師がすぐに蘇生処置をしましたが、そのまま逝つてしまつたそうです。痛みも無く、苦しまず、逝けたことは、本当に良かったと思います。神様、ありがとうございます。姉との思い出の中で心に残っているのは、何才位の時か、夜寝る時に、「子猿の冒険」という創作のお話をしてくれました。はつき

りと内容は覚えているので、孫が出来たら話して聞かせようと思つておりました。姉は、私より3年と3ヶ月前に生まれ、学年では4年上で、小さい頃から痩せて、背が高かつたので、「電信柱」や「日陰のもやし」、良くて「ツイツギ」等とあだ名をつけられていました。

姉が小学生の時、母は仕事をしていたので、私を連れて若林小学校へ行きました。授業中は横へ椅子を置き、給食の時はお弁当を持って行つたのですが、先生やお友だちが給食を少しずつ分けてくれました。遠足もついて行きました。

姉は人を疑うことをせず、正義感が強かつたと思います。ただ夫にはすごく甘えていました。何でもやってくれる優しい夫なので、私が羨ましさもあり、時々「ダンナ様に先立たれたらどうするの?」と言うと「私、1日も生きていられない」と言っておりました。神様はその人に耐えられない試練をお与えにならない、とは本当だと思えます。神様、ありがとうございます。残された家族をどうぞお守りください。(平塚奈津子)

## 説 教

## 『あなた方はキリストの手紙』

コリントの信徒への手紙二 3章1節～6節

種房惇子

コリントの教会は、パウロが宣教によって建て、我が子のように愛した教会でした。

「キリストにあつて、あなた方を生んだのは私です」（1コリ4・15）とパウロが述べているように、コリントの信徒に対する彼の愛情は、並々ならぬものがあり、涙ながらにこの手紙を書き送っています。

当時、コリントは多民族からなる国際都市であり、ギリシャ最大の貿易港であり、商業都市として発展していました。従つて社会的、経済的、道徳的に深刻な問題も孕んでいました。そのような状況下で、パウロの伝道によりユダヤ人やギリシヤ人の有力な信仰者の群れが形成されました。しかしパウロがコリントを離れると、生身の人間である信仰者の群れに、考え方の違いによる分派問題、偶像への供え物の問題、結婚問題、聖餐

式の問題、復活についての理解の問題など、困難な問題が生じました。パウロを中傷し、非難を加えようとする対立者が現れて、福音の真理が曲げられる危機が生じました。パウロは、教会の基礎が崩れて分裂しかねないことを危惧しました。教会共同体が内部で一致団結し、正統な信仰に基づく生活を送ることを強く要望し、このコ

リント信徒への手紙を書いたのです。

3章1、2節では、パウロが、当時習慣となつていたエルサレム教会など権威ある教会からの推薦状を所持していなかったため、パウロの使徒職に対する根拠や正統性を疑う者に対して、パウロ独特の論法により、論理的に神と使徒の関係を明らかにしているのです。つまり、コリントの教会の人たちが主に結ばれていること自体が、神がパウロを用いて宣教の任

に当たさせたことの証であり、パウロが神に選ばれた使徒であることの証拠であると述べています。信じる者が起こされている教会こそが、神が示してくださいました特別な証しであり（1コリ9・2）、使徒職を保証するのは書状ではなく、パウロによる宣教から起こされた回心者こそが、推薦状に匹敵すると主張しています。

ここでパウロが、問題の多いコリントの教会の信徒たちを「あなた方は、キリストの手紙です」と述べていることに注目すべきです。人間の赤裸々な現実の姿をさらけ出し、人間の醜い現実があらわにされている群れをパウロは、「キリストの手紙」と言うのです。

その理由としてパウロはエゼキエル書11・19を引用し、神の霊が石の心を取り除いて、神の霊に従う心を与えたと述べています。更に2コリ3・6で「神はわたしたちに、新しい契約に仕える資格、文字ではなく霊に仕える資格を与えてくださいました」とし、文字ではなく、霊による「新しい契約」が、文字である律法による「古い契約」に代わつてもたらされた

ことを告げています。「古い契約」は、ユダヤ教の律法遵守の道であり、「新しい契約」はイエス・キリストの十字架による神の贖罪により、罪赦され、永遠の命に生きる希望の道です。

20世紀の偉大な神学者カール・バルトは『私にみ言葉をください』でパウロの新しい契約の理解を「パウロは、古い契約である文字の務めが『栄光』を持つていることを認めたと、新しい契約である霊の奉仕が、文字の務めとは比較にならないほど、遙かに多くの『栄光』があることを確信しました。霊の奉仕を自らの務めと受け取り、神の僕として神に従う道を貫いたので」と述べています。「新しい契約」つまり、十字架の死と復活によって新しい命に生きる者とされ神の深い愛に應えて生きる時に、神と一つに結ばれ、神に栄光を帰することによって、真の喜びに生きることができるとパウロは告げます。信仰者が心の奥深くに永遠に刻まれた「キリストの手紙」として生きる時に、無限の深みと喜びと力が与えられると告げているのです。

## 図書茶話会報告



3月5日(日) 礼拝のあと、ひさしぶりに、図書委員会の「茶話会」を開くことができました。

この会は年に1、2回、本をテーマに「どんな本を読まれているのか」「心に残った本や紹介したい本」あるいは「自身の読書スタイルなどを自由に語っていたいただき、参加のみなさんと懇談します。

今回はお忙しい中、岸俊彦牧師が担当してくださり、昨年12月に朝日新聞の「書評委員が選ぶ『今年の3点』」を見たのがきっかけでお読みになったという本、『旧約聖書がわかる本』(河出書房)を紹介されました。旧約聖書者である並木浩一先生と小説家の奥泉光さんの共著であるこの本は、聖書のテキストが多く引用され、そのテキストについて著者のお二人が対談しながら読み解いて行くという形式をとっていて、聖書を開かなくても読み進めることができる本であると解りやすいレジメもご用意いただきました。

第一部・旧約聖書とその時代、

第二部・創造と、文明批判の伝統、第三部・神と人間、第四部・ヨブ記を読む、の4部構成であると、くわしく解説されました。その中で、神様は対話ができるように人間をお創りになった。男と女人々、一人ではなく話し合うことができるようにお創りになったのだ、というお話が心に響きました。話し合えば戦争も起こらないであろうと聞きました。

そのほか、新聞で紹介された他の2冊、並木先生の著作集全3巻と『ヨブ記注解』も紹介されました。そして、普段の岸先生は小説は殆ど読まない、最近パソコンで本を読む、文字も大きくできるし年をとったら便利、新聞も電子版で読んでいること。礼拝の30分の説教のために、その何倍も時間をかけて調べる、そうする時間がないよりも楽しい時間であるということもお話されました。礼拝の講壇の外の先生のライフスタイルの一端を伺うことができました。

3年前からご一緒に企画した、天国の榊原温子さん(図書委員)もきつと聞いてくださっていたことでしょう。(國田あつ子)

## 長老のファイル



3月12日礼拝後、西南支区総会が行われ、岸牧師、石室長老と共に出席しました。70名あまりの出席者で成立し、新年度の支区長はじめ三役の選挙や、常任委員の半数改選選挙が行われました。三役は全員再任となりました。

私はもう1年常任委員として奉仕させていただきます。毎月第1月曜日夜に常任委員会があるので、毎回色々な教会で行われ、さまざまな会堂を見ることができたり、また、毎回の礼拝で、常任委員の先生方の説教を聴くことができたりして、とても新鮮な経験をさせてもらいました。色々なタイプの牧師先生がいるのだから、と思うとともに、2年後に迫ってきた岸先生の後任の招聘に向けて、しっかりと長老会で取り組んでいかなければと思います。皆様のご計画を信じて長老一同力を合わせて、御心になつた経堂北教会の歩みが進められるように努めたいと思います。

3月から4月にかけては卒業・

進級の季節になります。私事になりますが、北区に教員として赴任してから9年になり、小学校で1年生で出会った子どもたちが中学校を卒業、ということでの流れを感じます。学校では、毎年、お世話される下級生が進級し、今度はその子が下の子のお世話をするというように役割が移っていき運営されています。教会も「キリストの『えだ』である私たち」が互いに補い合いながら、成長し、また、新しい枝を広げられるように一人一人がこのキリストを土台とする教会に繋がっていくことが大切なので改めて感じています。私自身、自分のことばかりに目が向いてしまいましたが、経堂北教会の長老として、また、西南支区の常任委員として、微力ですが、神様の導きを信じて歩んでいきたいと思えます。(大友太郎)



## 掲示板



- 棕櫚の主日礼拝  
4月2日(日) 午前10:15  
説教「石が叫び出すほどの賛美」中村謙一教師  
ルカ19:28-44
- 受難週祈祷会 4月5日(水)  
午前10:30 マタイ26:47-75  
午後7:00 マタイ27:1-31
- もより教会合同受難週礼拝  
4月6日(木) 午後7:00 於・経堂北教会  
説教「足を洗われる感覚」山畑 譲牧師  
イザヤ53:1-12、ヨハネ13:12-20
- 受難日祈祷会  
4月7日(金) 午後1:30 マタイ27:32-56
- イースター礼拝  
4月9日(日) 午前10:15  
説教「新たな出発」岸 俊彦牧師  
マタイ28:11-20 申命記4:32-40
- ※イースター墓前礼拝は行いません。
- 定期教会総会 4月23日(日) 礼拝後

## 編集後記



- ▽イースターを迎えるというのに、ウクライナ情勢は悪化するばかり。共に復活のキリストを信じている者なのに…。(酒井)

「栄 光」2023年4月号  
日本基督教団 経堂北教会  
〒156-0051 東京都世田谷区宮坂3-21-11  
電話：03-3428-5029 / FAX：03-3428-5038  
牧師：岸 俊彦  
編集：栄光編集委員会  
Email：kyodon@nifty.com  
HP：http://kyodokita.life.coocan.jp

## 牧師の書齋から



大江健三郎が亡くなりました。高校1年の夏休み、『死者の奢り・飼育』の読了が現代国語の課題でした。彼の研究者でもあった教師の趣味だと思いました。『われらの時代』『性的人間』も渋谷の大盛堂で購入しました。母が先に読んで「読むのは早い」と隠されてしまいました。『芽むしり仔撃ち』は何とか読むことができました。単行本で最初に読んだのが『個人

的な体験』です。頭に障がいをもった赤んぼうと共に生きる決断をした結末が印象的でした。

教会に行き、聖書を読むようになっていましたから、『洪水はわが魂に及び』を読まないわけにはいきませんでした。こぼしたお茶がしみついた上巻は、下巻とともに今も本棚にあります。『同時代ゲーム』と『懐かしい年への手紙』もあります。『万延元年のフットボール』は文庫本で読み始めたのですが、いまだ読了せずです。かなり前の作品ばかり読んでい

るのですが、よく覚えているのは『新しい人よ眼ざめよ』です。「父さん！父さん！どこへ行く？／おそれなさい」が速く歩かないで／話して／でないと、ほくは迷い児になる(ブレイク)と引用された詩に、「父よ」と祈ることができると難さを再認識させられました。たいして読んでいない小説より、『人生の習慣』『新年の挨拶』などのエッセイや講演集の言葉の方が心に残っています。誰かのため

とか、「信仰を持たない者の祈り」など、説教を準備する際、黙想の助けとなりました。一番ありがたかったことは、彼の恩師である渡辺一夫の著作に導かれたことです。『フランス・ルネサンスの人々』などを読んで、ユマニスムと信仰について考えさせられました。セルヴェを火刑にしたカルヴァンを取り上げ、「寛容は不寛容に対して寛容でありえるか」との問いや、「教養とは思いやりである」とか、いまだに彼の言葉に考えさせられます。(岸)